The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	はしがき
Author(s)	吉田, 豊; 森安, 孝夫
Citation	内陸アジア言語の研究. 1994, 9, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/21073
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

はしがき

本誌の発行母体が神戸市外国語大学から中央ユーラシア学研究会に移った事情は，前号「はしがき」に述べた通りである．それにともなって本誌の市販が可能となったが，この販売業務は京都の朋友書店（TEL. 075-761-1285）に委託することとなった．採算を度外視してこの面倒な業務を引き受けていただいた同書店の土江澄男社長に感謝する．これまで神戸市外国語大学から本誌の寄贈を受けていた研究機関のうち，英文学・国文学専攻しか持たないところは除き，言語学・歴史学専攻の研究室を有する多くの大学からは，引き続き購入していただけることとなった．またそれ以上に多くの個人の方々から定期購読という形で御支援をいただくことができたのは，この上ない喜びである．東洋学は，日本がその水準の高さと層の厚さとを世界に誇ることのできる数少ない学問分野の一つであるが，本誌はその一角を担う学術雑誌として，ますますその存在意義を高めていくものと確信する．

本誌は『内陸アジア言語の研究』と銘打つものの，これは狭義の言語学のみを対象とするものではない．歴史学の根本である史料（資料）のほとんどは「言語」で書かれたものであり，その言語資料を紹介したり，読解・分析する論文・報告は全て本誌の対象となる．我が国の在来の東洋学関係雑誌では，史料（資料）そのものを十全な形で発表するよりも，それに基づく議論を展開する方が優れた仕事とみなされる傾向にあった．そして紀要類以外は頁数に厳しい制限があるため，論の基になる原史料は部分的引用に止まらざるを得ないことが多かった．このような実情に鑑み，本誌では，新発見の一次史料（資料）の紹介，既知の史料（資料）の新しい解釈・訳註などを，頁数の多少に関わりなく掲載する方針を採っている．勿論我々も大々的な論考を軽視するわけではないが，言語資料の言語学的研究・古文書学的研究・文献学的研究のいずれにも同等の価値を認めるものである．巻末の執筆要項も参照され，積極的に投稿されることを期待している．

上記のような編集方針ではあるが，本号は偶々，歴史学的論考が優勢となった．ただし次号にはカルピニの旅行記のラテン語原文からの訳註，未発表のウイグル文棒杭文書の写真と解読などが掲載される予定である．好評の自作業績目録シリーズにはロンドン大学のN. Sims–Williams博士より原稿をお寄せいただいた．同博士は世界的に有名なイラン（とくにソグド）文献学者で，今秋よりロンドン大学教授に昇進予定である．

今回もまた前号同様，組版をはじめとする出版作業は，大阪大学文学研究科の大学院生である松川節・中村淳両君の献身的協力に負うところが大きい．

1994年5月10日

中央ユーラシア学研究会

責任編集
吉田　豊　　森安孝夫
（神戸市外国語大学）（大阪大学）